

# 宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館寄託史料「二見家文書」の翻刻について

宮崎市生目の杜遊古館

学芸員 鈴木 美慧

## 【要 約】

宮崎市歴史資料館3館は古文書を多数所蔵している一方で、未翻刻史料も多く、全ての古文書を十分に活用できているとは言い難い。その為今回は、宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館寄託史料の「二見家文書」の翻刻を行った。今回翻刻した箇所は西南戦争の関連文書が多く、薩摩軍の動きや、薩摩軍側から見た西南戦争について考察するうえで重要な文書群であることが分かる。今回翻刻した箇所の詳細については本年度の宮崎市歴史資料館研究紀要において成果をまとめるとともに、今回翻刻できなかった箇所についても翻刻を少しずつ進めていきたい。

## はじめに

宮崎市生目の杜遊古館（以下、遊古館とする）をはじめとする宮崎市歴史資料館3館においては、古文書を多数所蔵している。しかし、古文書の文字（「くずし字」という）を現代の文字に書き起こす「翻刻」作業がなされていない史料も多く、全ての古文書を十分に活用できていない。翻刻は専門知識や時間が必要なうえ、未翻刻の史料は内容を読み取り難く、活用するのは至難の業となるからである。

そこで今回、宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館（以下、天ヶ城とする）寄託史料の「二見家文書」を対象として、翻刻作業を行った。天ヶ城にて該当文書の撮影を行い、遊古館にて写真を見ながら翻刻を行い、内容について考察する。最終的には本年度の宮崎市歴史資料館研究紀要において成果をまとめ、以降の二見家文書活用の一助としたい。

## 第1章 二見家文書について

### 第1節 二見家文書の概要

二見家文書は、近世を通じて去川関所の御定番役を勤めてきた高岡郷士二見家（宮崎市高岡町去川地区）に伝存する文書群である。旧二見家住宅は宮崎県指定の有形文化財、去川の関跡は宮崎県指定の史跡となっている。平成8（1996）年に、二見家文書は天ヶ城へ寄託された。総数は600点近くになる。平成19（2007）年に、天ヶ城の研究紀要第4号『宮崎市高岡町古文書史料集（三）』（以下、史料集（三）とする）として一度翻刻されたことがあるが、その際翻刻されたのはごく一部の史料のみ

であった。

二見家文書は当初、4箱分の木箱に分かれており、その後それぞれA～Dと記号が振り分けられ、整理された。このうち、『史料集（三）』ではDの文書群が中心となって翻刻されていた。

今回翻刻を行ったのは、二見家文書Aである。次節で、その内容について概説する。

## 第2節 今回翻刻分の概要

二見家文書Aは、明治10～15年を中心とした、全150通の文書群である。そのうち、今回翻刻したのは56通であり、翻刻文字数は約13000字となった。二見家12代<sup>1</sup>当主の二見昌賢の名が多く見られる。昌賢が当時どのような役職であったかは定かではないが、今回翻刻分では「内山村副戸長」から「去川諸締掛衆」に対する文書が多く残っていた（二見家文書A-11, A-21等。以下「A-数字」と記載）。「去川諸締掛衆」が具体的にどのような役割であったかは明確ではないが、少なくとも去川地区の有力者であったことは間違いないであろう。

文書の種類としては、行政文書や書簡、書付など様々であったが、56通のうち21通は西南戦争に関連する内容と推察される。表1は、この21通を抜き出したものである。なお、「掲載」という項目に●印がついたものは、『史料集（三）』にも翻刻文が掲載されていることを示す。

表1 西南戦争関連文書抜き出し

史料群	番号	史料名	和暦	月日	差出(作成)	宛名	備考	掲載
A	3	勅書写(鹿児島縣下逆徒熊本縣二乱入二付)	明治10	3月12日	鹿児島県令 大山綱良			
A	4	写(勅使儀官柳原前光ヲ以詔命二付)	明治10	3月 日	鹿児島県在留従三位—、従二位—	太政大臣 三條實美殿		
A	5	[書簡(去ル廿二日肥後国川尻町着二付)]	明治10	3月6日				
A	10	[書簡(先日百引二掛り大勝利二付)]	明治10	7月14日	二見昌懿	二見昌賢様		●
A	14	[書簡(明日ヨリ和泉口ヨリ出発二付)]	明治10	1月2日	二見昌懿	二見昌賢様		●
A	29	報知之概略(四日夜夜明方戦争相始り二付)	明治10	5月12日				
A	30	[書簡(鹿児島近在坂元村江在陣候二付)]	明治10	5月24日	二見昌賢	二小区事務取扱所御中		
A	33	[覚(手負人書付 他)]	—	7月12日				
A	34	記(ミニヘール鑄型二付)	—	7月6日	高城石山村出張行進隊大小荷駄	二見昌賢殿		
A	37	[覚(隊号替二付)]	—	—				
A	40	[書簡(本日之報知二付)]	明治10	7月14日	紙屋出張 益山貞蔵	二見昌賢様	表裏に文書	●
A	42	写(官軍鹿児島城山江攻撃二付)]	明治10	9月25日	鹿児島県令 岩村通俊 他	所在副戸長 他		
A	44	平民出発しらべ	明治10	1月4日	二見昌賢	高岡事務扱所御中		●
A	45	[通知(今般政府へ尋問之筋有之二付)]	明治10	2月 日				
A	46	[通知(岩見福右衛門他七名志願二付)]	明治10	4月3日	二小区事務扱所	二見昌賢殿		●
A	48	[覚(肥後国ニ於テ當分戦闘二付)]	明治10	4月5日				
A	47	記(刀剣之事)	明治10	4月 日				●
A	49	(出発人名書出し)	明治10	—				●
A	50	写(福嶋三番隊都城出立二付)	—	15日				
A	52	[覚(佐土原振武武番)]	—	—				
A	53	[書簡(内蜜通知)]	明治10	2月24日	塚田淳			

高岡郷は薩摩藩の外城であったため、文書のほとんどは薩摩軍に関するものである。年号が明確である文書は全て明治10(1877)年であり、日付を見ても2～9月と、西南戦争の最中のものが大半である。「報知」や「内蜜通知」などの文書においては、当時の戦況が記されており、各地で戦況に関する報告が飛び交っていた様子もうかがい知ることができる(A-29, A-53など)。このうち二見家文書A-53については、次章で解説する。

書簡の差出人等でその名が見られる「二見昌懿」は、薩摩軍の「振武三番中隊」に所属していた(A-

<sup>1</sup> 『史料集（三）』、2頁。

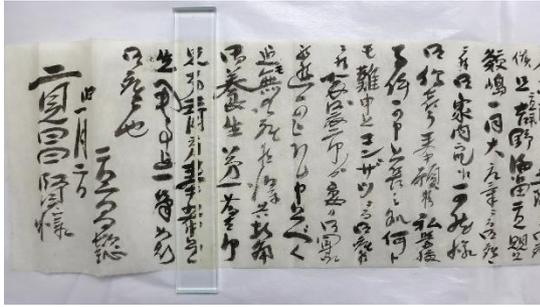


図 1 二見家文書 A-14 (一部)

10, A-30) 人物であり、その近況を昌賢に宛てて送っている。その内容は戦況報告に加え、「二見丑吉野海江田 (中略) 一同大元氣ニ而御座候ニ付御家内衆江可然様御傳聲奉願候」(A-14) などというように、戦場に居る自分や同郷の人々の無事を知らせ、御家内衆へもよろしくお伝えくださいという内容も含まれ、上記の「報知」等と比べると私的な色合いが強い。

この他にも、「平民出發しらべ」(A-44) や「出發人名書出し」(A-49) など、去川やその近辺から戦場に出発した人々の名やその日時が分かる文書などもあった。大半は『史料集(三)』に翻刻されているものの、未翻刻の文書もあり、また今回翻刻できなかった文書の中にも似た内容のものが見受けられた。これらを全て翻刻し、整理することによって、去川近辺から西南戦争に参加した人々の身分や配属先、その人数などをより明らかにできるかもしれない。

## 第2章 翻刻文と内容の考察

### 第1節 二見家文書「書簡(内蜜通知)」の翻刻と概要

本節では、今回翻刻した文書の内、二見家文書A-53の「書簡(内蜜通知)」について、翻刻文と概要を記載する。なお、原文は縦書きであり、旧字体・異体字・略字等は極力常用漢字に改めた。また、適宜読点を挿入した。

十年二月廿二日午前七時、熊本県内川尻江、当県出兵行軍之處、先手斥候隊江熊本県士ヨリ内蜜通知之趣キハ、鎮台ヨリ行路諸々江地雷火設置有之候間、行軍之際深ク注意有之度旨、報知ニ及ヒタル末、前記川尻ニ於テ鎮台ヨリ番兵繰出し居候處、行軍へ相抗シ砲撃ニ及ヒ候ニ付、直ニ薩兵相応シ進撃之處、一時ニ相破レ、鎮台兵ハ狼狽散乱シ、兵卒ヲ捕縛及ヒ質問候處、手續概略一々明白申出タル由

一 熊本城下市中、何方ト云所ハ不相分候得共、焼払タル趣キニテ、弾薬庫、及ヒ米倉等モ失致シタル由シ

右火薬庫之出火ニテ、出水辺江砲声響キタル物カ、已ニ昨廿三日出水ヨリ報知砲声云々モ附合ス

一 前文之概略ハ、今廿四日加治木士何某帰県々庁へ申上候

一 鎮台兵本営ヨリ道去り模様ニテ、熊本県士ヨリ本営ハ已ニ乗り取りタル趣キニテ候

明治十年二月

鹿兒島於上町大峰益太郎所ニ隊かへ候也

塚田淳

(二見家文書A-53)

本文の概要は以下の通りである。

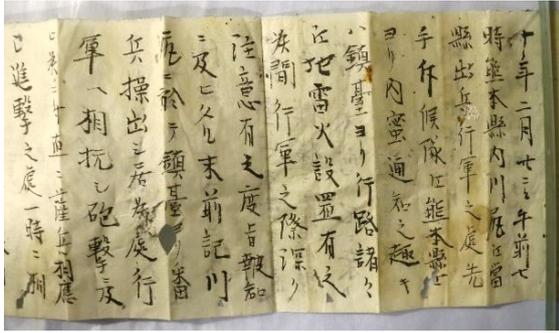


図 2 二見家文書 A-53 (一部)

(明治) 10年2月22日午前7時に、熊本県の川尻へ出兵・行軍していたところ、先手斥候隊へ熊本県士より内密に通知があった。それは、鎮台より行路諸々へ地雷が設置されているので、行軍の際は深く注意するように、という内容であった。また、川尻において鎮台より番兵が繰り出している時に、(薩摩軍の) 行軍に抗い砲撃に及んだため、直に薩兵が応じ進撃したところ、一時に打ち破り、鎮台兵は狼狽散乱した。その際兵卒を捕縛し、質問したところ、

ろ、手続概略について一々明白に申し出たとのことである。

また、熊本城下市中について、どこかは分からないが、焼き払ったということで、これにより、弾薬庫、及び米倉なども失ったとのことである。この火薬庫の出火は出水辺りで砲声が響いていたことと関連しているものであろうか、(そうであるならば) 既に昨日(23日)に出水から報知のあった砲声云々とも附合する。

これらについての概略は、本日24日に加治木士の何某が帰県し、県庁へ申し上げている。

鎮台兵は本営より去った模様であり、熊本県士によれば本営は既に乗っ取ったとのことである。

## 第2節 二見家文書「書簡(内密通知)」の考察

第1節で翻刻した「書簡(内密通知)」は、本文の内容から明治10年2月24日に作成されたものと考えられる。西南戦争について、明治10年2月14日に薩摩軍が鹿児島を進発してから同月27日の間は、薩摩軍が優勢な時期とされる<sup>2</sup>。書簡作成日時もこの期間に含まれていることが分かる。差出人は塚田淳であるが、この人物の出身や、二見家とどのような関係があったかは定かではない。この人物が作成した書簡が二見家文書Bにも含まれているようであるため、翻刻を進めていけば推定できるかもしれない。

本文前半は、熊本県の川尻を行軍していた際、熊本県士から内密に知らされたことが中心である。鎮台とは政府側の軍であるが、これを打ち破り、兵卒を捕縛したとある。薩摩軍が優勢な様子が読み取れる。

後半の一つ書きでは、熊本城下市中のどこかが焼き払われたことが分かる。薩摩軍と政府軍、どちらが焼き払ったのかは明確には分からないが、文脈上では政府軍の可能性が高いと考えられる。また、これについて差出人の塚田が「出水辺江砲声響キタル物カ」「昨廿三日出水ヨリ報知砲声云々モ附合ス」と考察を加えており、塚田自身も23日に出水から報知を受けていたことが分かる。加えて次の一つ書きも、加治木士の何某が県庁へ概略を伝えに行ったという内容であり、他の文書にも「右一昨十日都城方

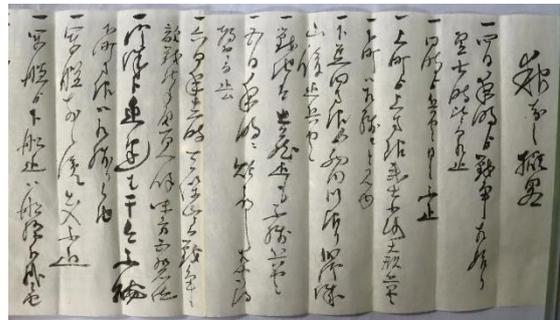


図 3 二見家文書 A-29 (一部)

<sup>2</sup> 『西南戦争のリアル 田原坂』、11頁。

高城への報知ニ付」(A-29) などという記述がある。このことから、西南戦争当時は各地に伝令が飛び交っていたことが推測される。

この書簡に書かれた内容について、『宮崎県史』には、2月21日に「薩軍と熊本鎮台斥候兵が川尻で初めて交戦」という記述があり<sup>3</sup>、本文前半と同じことを指している可能性がある。本文後半については、他の文書に「廿二日肥後国川尻町へ着其日方熊本城へ進撃候処献兵隊熊本市中ヲ焼尽シ」(A-5) などという記述があり、本文後半の一つ書きと内容が概ね合致する。このことから、内容の信憑性は高いように思われるが、よりその真偽を明確にするには、先行研究や今回翻刻分以降の文書等を併せた確認と考察が必要である。

## おわりに

以上、二見家文書の翻刻について報告した。二見家文書Aは西南戦争関連文書が多く含まれ、薩摩軍の動きや、薩摩軍側から見た西南戦争について考察する上で重要な文書群であることが分かる。また、表1には含めなかったものの、西南戦争関連文書の可能性があるものも多い。これらの文書については今後も考察を深め、改めて整理したい。

今回の翻刻について、元々筆者の専門は近世であり、二見家文書Aのような近代文書、特に書簡は独特の言い回しが多く、また書き手によっては文字の癖が強く出る。その為、翻刻に手間取り、結果として当初予定していたように円滑に進めることはできなかった。加えて、内容考察よりも翻刻を進めることを優先したために、西南戦争に関する知識が充分とは言い難く、書簡中の地名や出来事について、具体的に特定できていない箇所も多い。

とはいえ、限られた史料のみで考察を進めることに限界があるのも事実であり、とある出来事や内容について、最初に読んだ時点ではその意味が分からずとも、後に読んだ古文書によって理解できることも往々にしてある。今回読んだ古文書を読み返し、考察を深めるとともに、西南戦争に関する先行研究を参照し、知識を蓄え、本年度の「宮崎市歴史資料館研究紀要」において成果をまとめたい。そして、今回翻刻できなかった分についても、少しずつ翻刻を進めていきたい。

## 引用文献・参考文献・参考資料リスト

- 1) 宮崎市教育委員会・天ヶ城歴史民俗資料館、『研究紀要第4号 宮崎市高岡町古文書史料集(三) 去川関所御定番 二見家文書』, 宮崎市教育委員会・天ヶ城歴史民俗資料館, 2007
- 2) 中原幹彦, 『西南戦争のリアル 田原坂』, 株式会社新泉社, 2021
- 3) 宮崎県, 『宮崎県史 通史編 近・現代1』, 宮崎県, 2000
- 4) 宮崎県, 『宮崎県史 史料編 近・現代2』, 宮崎県, 1993
- 5) 加治木常樹, 『薩南血涙史』, 大和学芸図書株式会社, 1976

---

<sup>3</sup> 『宮崎県史 通史編 近・現代1』, 287頁。